

研究ノート

アクティブ・ラーニングによる中国古典詩の教授方法の提案

A Trial Practice of Active Learning Methods for Teaching Chinese Classical Verse

川口 喜治

Yoshiharu KAWAGUCHI

はじめに

本稿は、アクティブ・ラーニングの方法により、中国古典詩を教授する私案を提出するものである。この案は、実際に、2014年、2015年に、それぞれ一回、山口県立大学国際文化学部国際文化学科の高校生向け模擬授業で試行した内容に基づいている⁽¹⁾。残念ながら、比較的短時間の模擬授業であったため、学習効果についての測定を行なうことができなかったが、それは今後の課題として、試行内容に論者自身の気付き等を加えて備忘としてここに記すものである。PDCAサイクル（plan-do-check-action cycle）のPDの段階と理解して頂きたい。

なおすでに教育の世界では常用の語彙となったが、アクティブ・ラーニングについての定義を文部科学省Webにおける平成24年8月28日・中央教育審議会答申「用語集」⁽²⁾で見ると、以下の通りである。「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」

また上記定義に「学習」ではなく、「学修」とされていることについては、同答申に「大学設置基準上、大学での学びは「学修」としている。これは、大学での学びの本質は、講義、演習、実験、実習、実技等の授業時間とともに、授業のための事前の準備、事後の展開などの主体的な学びに要する時間を内在した「単位制」により形成されていることによる。」⁽³⁾とあり、本稿でも「学修」「学修者」という用語に統一する。

さて、大学の文学の授業において作品を取り上げる場合には、多数の受講者を対象とした講義形式による教員から学生への一方向的な作品解説の性質が強い教授方法、あるいは比較的少人数の受講者を対象とした演習形式による輪読での発表、討論という形が一般的であると考えられる。後者の討論の場合も、教員と発表担当学生との間での質疑応答が中心に進められ、他の受講者はそれに関する意見を教員から求められない限り自発的に意見を発表しないのが一般的なあり方であろう。

論者は、このような講義や演習の教授方法を否定するものではない。しかし一方で、上記答申の「用語集」の定義にあるように、「学修者の能動的な学修への参加」、付け加えるならば「学修者『全員』の能動的な学修への参加」による授業を試みることも、以下のような点において、学修者の文学理解には有効な方法であると考えられる。

学修者自身が試行錯誤を繰り返しながら能動的に作品の読解に関与してゆくことは、学修者自身の文学作品の読解・鑑賞の技術や能力を高めることに直接的に繋がる。さらにこの学修は、作品読解の快楽（よろこび、おもしろさ）を共同作業の中で自分自身で体験してゆくことに等しく、そこには学修者の文学に対する興味・感心を高める効果が期待される。手垢のついた表現ではあるが、活字離れ、文学離れが若者のみならず多くの世代において見受けられる傾向がある昨今、文学作品教授の場においてこのような学修方法が試さ

れる価値はあると論者は考える。

そしてこのような学習活動における思考の作業・訓練などは、学修者によって他の学問分野においても応用され、学修者の知識、理解力、行動力の修得や向上に大いに資するものであると考えられる。

1. 学修環境と学修者

教室の教授側設備としては、プレゼンテーションソフトを用いるため、パソコン1台、プロジェクター1台、スクリーン1張が必須である。できれば、プレゼンテーションソフトを同時に二つ立ち上げ、それを別個にスクリーンに投影する設備があるのが望ましい。その場合は設備機器が二倍必要となるかも知れない。

学修者側の設備としては、5名から6名程度のグループが作れる机と椅子、教員の出す質問に対する解答を導き出すために学修者が話し合って書き込むことが自由にできる大きめのホワイトボードが必要となる。書き込みに用いるマジックは、問題解決の思考を整理、明確化するためにも、赤・黒・青の3色は必要であろう。但し色が多すぎても思考の整理に混乱を招く恐れがある。ホワイトボードの代わりに、模造紙と大きめのポストイット（3色程度）を使用するのも良いであろう。

ホワイトボードの利点は、書き込み・消去が容易であり、絵図の作成も簡単にできることである。欠点は、次の課題に移るときに、書き込みの消去が必要となり、作業のつながりが途切れやすことにあろう。ただこれは、学修者のほとんどが所有しているスマートフォンのカメラ機能により、ボードの画像を残すことにより解決されよう。

一方、模造紙とポストイットの利点は、成果の保存性にあり、欠点は書き込み・消去の自由度・融通性に欠けることである。論者が想定する授業の場合は、学修者がその思考を自由な形で展開し表現してゆくことを期待しているので、ここではホワイトボードを使用したい。

なおグループごとにノートパソコンとその画面を複製するモニタを準備する方法も想定されるが、パソコンでの文字の打ち込みや絵図の作成にはフリーハンドより時間を要することが一般的であり、特に後者は熟達した技術が必要であり、授業において自由度、融通性、まさにアクティブ性が損なわれる可能性が大きいと考えられる。興味、関心、技術などが異なる学修者を対象にする場合は、学修者にとってユニバーサルな方法を採用することが最も肝要であり、いたずらに所謂ハイテクノロジーを指向すべきではない。

授業の進め方は、課題ごとに、教員による課題の提示→学修者のグループワーク→学修者のホワイトボードを用いた発表→各グループの発表に対する教員と学修者による質疑応答やコメント、とする。

次に学修者の中国古典詩に対する知識や理解のレベルは、高等学校卒業程度を想定している。クラスの規模つまり学修者の人数は、大学における一般的な授業時間90分を考えた場合、1グループ5名、計40名程度が妥当であると思われる。課題の数と課題ごとの所用時間とを考え、また上記の模擬授業の経験から、このような人数と判断した。

なお、幸い論者の勤務校・山口県立大学は、多くの教員や事務職員の方々の絶大な努力により、平成24年度「グローバル人材育成推進事業」（文部科学省）に採択された。その実践の一つとして、アクティブ・ラーニング・スタジオ（Y-ACT）が設置された。このスタジオについての勤務校Webの記述には「グループ学習に適した教室で、グループでのレポート作成、プレゼン練習、フィールドワークの準備ミーティング、さらには外国書講読会など自主ゼミの場として、学生自らが使い方をアレンジできます。」とあり、その主な用途として、「学生の主体的な学びを促す授業／自主ゼミ学習（ラーニングコモンズ）／プレゼンテーション（各種研究発表会）／海外大学等、学外とのwebミーティング／大学生の自主的な学習会、フォーラム／映像設備を活かした自主的な展示会」⁽⁴⁾が例示されている。この教室は、本稿が述べる授業の実践に適切で十分な設備を有している。逆に、本稿の着想の出発点は、実は、このスタジオを利用して、一見このスタジオのコンセプトと無縁に見える中国古典詩の読解の授業を展開してみようとしたことにある。以下に、勤務校Web掲載のスタジオの写真を掲載する⁽⁵⁾。プレゼンテーションソフトの画面の投影が複数種類同時に可能になっていることにより、本稿の授業は大いに裨益された。改めて本事業採択に力を尽くされた方々にお礼を申し述べたい。



2. 原文のみによる解釈作業のグループワーク

以下、作品解釈のグループワークに対する資料提示は、難易度（原文のみ）が高い方から低い方（現代日本語訳）へと進むようにする。そうすることで、学修者の多様な、場合によっては極めてユニークな解釈も可能となり、併せて作業における討論の活発化も期待される。

まずは題材とする中国古典詩の原文のみを学修者に対して提示する。

ここで、中国古典詩を題材とすることについては、当然ではあるが日本では漢字が使用されており、また一般的に、中学校・高等学校の学習にも「漢文（古典中国語）」の授業が設けられている。つまり学修者は、古典中国語に対しほぼ共通で同じ水準の知識・理解を有している。したがって大学の学修者に対して古典中国語で書かれた中国古典詩の原文のみを示し解釈を試みさせることはことは、ほとんどの学修者に馴染みがないフランス語やドイツ語などの言語による作品を原典のまま示すことと比較し、決して無理なこととは言えないであろう。

本稿では、我が国においては、井伏鱒二の「ハナニアラシノタトエモアルゾ／「サヨナラ」ダケガ人生

中国歴代王朝表	
殷	BC約1700~約1100
西周	BC約1100~約770
東周	
春秋時代	BC770~403
戦国時代	BC403~222
秦	BC221~207
西漢(200)	BC206~AD8
新	8~23
漢(淮陽王)	23~25
東漢(200)	25~220
<三国時代>	
魏	220~265
呉	222~280 (西晋・天下統一)
蜀	220~263
西晋	265~316
<南朝> (南北朝時代)*	
東晋	317~419
劉宋	420~479
齊	479~502
梁	502~557
陳	557~589
隋	581~618
唐(300)	618~907
五代(50)	907~960
北宋(150)	960~1126
南宋(150)	1127~1279
元(100)	1279~1367
明(300)	1368~1661
清(250)	1662~1911
中華民国	1912~
中華人民共和國	1949~

ダ」(後出)の七五調訳によって原作以上に親しまれているとも言える著名な作品である、唐代、晩唐の人・于武陵の「勸酒」を題材とする。原文は次の通りである。「勸君金屈卮、滿酌不須辭、花發多風雨、人生足別離」(『全唐詩』卷595)⁽⁶⁾。さてここで、唐代といっても学修者の中には、はっきりと時代を認識できない者もいると思われ、また後の課題(第6節)のためにも、左のような簡単な中国歴代王朝年表を示し、唐代の時期を確認するのが良いであろう。詩人についての情報は、この場合は、「于」が姓で「武陵」が名であることを示すだけで問題はなく、伝記についても810年~⁽⁷⁾と示すだけでよいであろう。

なお本稿で掲げる図(スライド)の背景は、印刷上の便宜を考慮し、実際使用したものとは違う白色としている。

次に、原文の提示である。上述のように、書き下し文なしで、原文のみを示す。このとき、現代中国語音による作品の音読を行ない、中国古典詩の響きに触れてもらうのも学修の導入効果として期待されよう。学修者が中国語履修者であるならば、全員で現代中国音による音読をするのも、作品の音律美を感得する上で重要なことであろう。

旧字体の漢字は、まずそのまま提示する。このときに、現代の学修者にとってほとんど馴染みのない旧字体がどの新字体に相当するか、各グループで話し合わせ、ホワイトボードに書かせて一斉に掲げてもらう。答えは、プレゼンテーションソフトのアニメーション機能によって、新字体に変換する方法が効果的である

う（下図左）。またこれに併せて、右と同じ方法で、身近な漢字における新旧の字体の違いを同じようなクイズ形式で出題し（下図右）、グループワークにより解答してもらえば、学修者が旧字体に興味を抱く契機とすることができよう。

*于武陵(うなりよし) || 唐代の詩人。B.O.S.?

于武陵「勸酒」
勸

勸君金屈卮
滿酌不須辭
滿酌不須辭
花發多風雨
人生足別離

旧字体と新字体

學 獨 國 龜 讀 舊 體
学 独 国 亀 読 旧 体

さて、次がグループワークによる、作品解釈の段階である。今回学修者は、辞書は一切使用しない。中国古典文学、中国古典詩にある程度通じている学修者は別として、原文のみでこの作品を解釈することは困難であろう。そこでグループワークにおける解釈の指針として、次のような項目を示す。この場合、原文をスクリーンに投影したまま、課題を別のスクリーンに投影できることが望ましい。課題は、グループワークが

進行しやすいように、できるだけ必要最低限のものとする。ここでは、左図のスライドのように、以下の設問に限定した。

**みんなで話し合って
考えてみよう！**

①この詩は、どのような場面で詠まれたのだろうか？

- ・時(季節)
- ・場所(何をしているのか)
- ・登場人物

②この詩のテーマは、何だろうか？

そのように考えた理由もまとめよう！

①この詩は、どのような場面で詠まれたのだろうか？

- ・時(季節)
- ・場所(何をしているのか)
- ・登場人物

②この詩のテーマは、何だろうか？

ここで重要なのは、各設問に対して、その答えとなった理由を考えさせることである。最初の段階では、例えば、季節に対する答えとして、転句の「多風雨」を根拠に梅雨や台風の季節という答えが

出る場合もありうる。しかし、答えの正否ではなく、思考の論理性を訓練することが大切であるので、間違った答えにも、間違ったなりの理由を提示させることの方が重要となる。これは、この授業全般に亘る留意点でもある。

さて学修者は、理解できる漢字を読み取って、答えを捻出してくるであろうが、問題の難度が高いため、作業の時間は比較的短くし、結果を先ほどと同様に、ホワイトボードに書かせ、グループごとに簡潔に発表させる。もちろん教員は正解を提示しない。

このときに、各グループは、他のグループの解釈やアイデア、思考方法をお互いに共有することができるので、教員は、学修者に、それを参考にしあって次の学修段階に活用するように喚起する。複数のグループ単位の学習によるアクティブ・ラーニングでは、単にグループ内での作業・理解の共有にとどまらず、グループ間そして学修者全体での共有を可能にすることが、肝要となろう。特に、絵図を用いて、解釈を試みているグループには、注目を与えてよいであろう。これはやはりこの授業全般に亘り重要であると考えられる。

3. 書き下し文と資料写真の提示による解釈作業のグループワーク

次の段階の資料は、詩題と作品に書き下し文を示したものである。書き下し文は、言うまでもなく日本語による和訳のスタイルの一つであり、原文のみの中国古典詩に比べて、解釈が容易となる。しかし、書き下し文は文語であり、学修者にとっては現代語訳にくらべて難易度の高いものである。

書き下し文は、原文と共に示し、両者を比較対象させることを通じて、学修者に前段階での学修の振り返りと間違った事項への気づき、あるいは新たな発見を促すのがよいであろう。書き下し文は下図のスライドに示したような形で、以下の通りとする。このとき、先に述べたように、もう一度同じ設問を提示することが望ましい。

于武陵「酒を勧む」

勸君金屈卮 君に勧む 金屈（くつ）卮（し）
 満酌不須辞 満酌（まんしゃく）辞（じ）するを須（もち）いず
 花発多風雨 花発（ひら）いて 風雨多し
 人生足別離 人生 別離足る

まず、教員が声に出して書き下し文を読みあげ、次に学修者とともに数回声に出して読むことで、学修者にとって、作品の意味は不明確であるとしても、身体的な感覚により作品を感じることで、作品への親しみや理解が高まると思われる。実際に中国古典語の書き下し文は、読みのリズムをつかむことが大切であり、逆にそのリズムをつかめば、ある程度作品の解釈ができるものであると考える。

ここでも第2節と同様の解釈のグループワークを進めてもらい、発表をしてもらおうが、この段階で一番解答が容易である課題①の時（季節）について、正解「春」を示すのがよいと思われる。その場合、中国で春に散る花は、日本のように桜をイメージしてはならず、桃・李・梅などであることを、下図のように画像によって示すのが効果的であろう。カラーの画像を示すことにより、作品風景に対する学修者のイメージがより鮮明になるからである⁽⁸⁾。

同じように、作品中の「金屈卮」は、名物である点でこの詩の中で最も難解な語彙であるので、画像とともに「曲がった取っ手のついた黄金製の大きな丸い盃」であることを示す必要があるだろう⁽⁹⁾。なお以下に示した画像が、「金屈卮」に相当、類似するものであるか、論者は確認できていない。しかしこのような豪華な杯が少なくとも詩のイメージとして歌われていたことは学修者に示しておくべきであろう。なおそれが、実際に用いられていたかどうかは別問題である。

次に、上記の書き下し文において学修者にとって最も解釈が難しいのは承句の「満酌」「須」「辞」と転句の「発」であると思われる。

「辞」は「辞書」「辞典」の辞として、その意味を第一義的に「ことば」に結びつける傾向が一般的でもある。「辞去」「辞退」「辞職」の「辞」であることは、通常使う語彙であったとしても、なかなか思い浮かばないであろう。しかしこれについては、この段階では答えを示さない。

同様に「発」は「出発」「発車」の発のように「はじめる」という意味に結びつけることが一般的であり、常用の「開発」「啓発」「発展」の「発」であることには思い当たらない。こちらに関しては、「はな はって」と訓むことはできないので、「ひらく」とだけ訓んでおき、それ以上の説明は加えないことにする。

なお、「辞」「発」については、学修が進んだ、第5節で説明することとする。

桃



李(すもも)



梅



金屈卮(銀製)?



4. 井伏鱒二の訳の提示による解釈作業のグループワーク

次の段階としては、現代日本語訳を示す方法もあるが、ここでは、幸いに井伏鱒二による七五調の名訳があるので、それを示すことが、ひとり中国古典詩ならず、日本語に特徴的な七五調の文体やそれを用いた訳文に学修者が親しむ契機となり、より幅広い学習効果が期待されると考えられる。また第3節と同様に、設問も示しておく。

同時に、井伏鱒二の『厄除け詩集』「訳詩」⁽¹⁰⁾を紹介し、七五調訳に興味を抱いた学修者に、さらなる自主的な学修の幅を広げてもらうことがよいであろう⁽¹¹⁾。

井伏訳は、下のスライドにも示したが、以下の通りである。

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

ここでも、第3節と同様に、井伏訳を教員と学修者とで声に出して読むことが、作品の身体的理解や親しみを増幅することに繋がるであろう。ここでこの学修とは関係が強くはないが、井伏鱒二の写真⁽¹²⁾をその生卒年とともに示しておくのが、学修者にとっては井伏訳への興味を大きくする効果を持つであろう。

このような準備のあと、第2、3節と同じグループワークと発表をしてもらおう。ここでは、第3節で示した春の季節のほかに、「酒を飲んでいる」「別れにかかわる内容」であることが共通理解となるように、指導するようにすればよいと考える。どのような人物が何のために酒を飲んでいるかという最終理解の前段階をクリアできればよいであろう。

井伏鱒二の名訳

コノサカツキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

「井伏鱒二全詩集」三「厄除け詩集」訳詩（若波文庫、2004年）

井伏鱒二(いぶせ ますじ)



1898年(明治31年)2月15日 - 1993年(平成5年)7月10日

5. 現代語訳の提示による解釈作業のグループワーク

作品解釈の最終段階として、わかりやすい現代日本語訳を提示し（下図左）、これまでと同じような作業と発表を学修者に行なわせる。日本語訳は、たとえば次のようなものとする。「さあ君に、こがねのさかづきを勧めよう。／なみなみとついだ酒を、断わったりなどせずに飲んでくれたまえ。／花の季節に（それを散らしてしまう、いじわるな）風雨が多いように、／人生は（楽しい時を一緒に過ごすことをゆるさない、つらい）別れが満ちているのだから。」

このように言外の意味を補えば、解釈の多様性を妨げてしまう危険性も承知しているが、グループワークの素材としては中国古典詩の標準的な解釈を、意味を補って示す方が学修の進行上効果的であると考えている。

そして、ここまでの解釈を示せば、登場人物を除いて、以下のような（下図右）のような答えが大方のグループから出るに違いない。

①この詩は、どのような場面で詠まれたのだろうか？

- ・時（季節） 春
- ・場所（何をしているのか）酒宴
- ・登場人物 男性（二人以上）

②この詩のテーマは、何だろうか？

- ・別れの悲しみ

さあ君に、こがねのさかづきを勧めよう。

なみなみとついだ酒を、断わったりなどせずに飲んでくれたまえ。

花の季節に（それを散らしてしまう、いじわるな）風雨が多いように、

人生は（楽しい時を一緒に過ごすことをゆるさない、つらい）別れに満ちているのだから。

①この詩は、どのような場面で詠まれたのだろうか？

- ・季節 **春**
- ・場所 **酒宴**
- ・登場人物 **男性二人(以上)**

②この詩のテーマは、何だろうか？

- ・別れの悲しみ

そしてそれぞれの答えに対する理由は、時は「花が発く」で春、付加するならば「風雨」で春の嵐。場所は、「酒を勧める」や「満酌」で酒宴。テーマは、「別離足る」で別れ、という説明ができればよいであろう。

本学修においては、漢和辞典などの辞書の使用や古典中国語の文法についての細かな説明はしない方針であるが、第3節に述べた承句の語彙については、次のような説明が少し必要であろう。「須」は、「～しなければならない」という意味を持ち、ここでは相手に「不須」で「～してくれるな」と懇願する意味と語気を持つこと。「辞」は、「辞書」「辞典」などと用いられる「ことば」の意味ではなく、「辞去」「辞退」「辞職」などと用いられる「ことわる」の意味であること。特に後者は右のような二字熟語として日常的に使用する意味ではあるが、古典中国語の文章に一字単独で存在すると解釈に迷う用例であり、通常の「ことば」の意味で通じないときは、このような熟語を想起して、その意味を考えるようにするとよいといった指導をするのがポイントであろう。同様に「発」も「はじめる」の意味ではなく、「開発」「啓発」「発展」のように同義結合している熟語を示し「ひらく」の意味であることを説明すればよいであろう。これに加えて「展開」という同義結合の熟語があることも補足的に説明することもできるだろう。

またこの機会を利用し、同様の例として「告白」「白状」「自白」などの「白」が「しろ」ではなく「言う」の意味であり、学修者はこの意味でも日常的に使用していることを示せば、学修者の漢語に対する興味や能力が高まると考えられる。

さて、この作品の解釈・理解において、高等学校程度の中国古典文学・中国古典詩の知識を前提とした場合、学修者にとって最も解答が難しいのが、登場人物である。ここで学修者に教授しておくことは、中国古典詩の作者がほとんどといってよほど男性であったこと、そしてその直接の受容者（作品が贈られた相手）も男性であったことである。「別れの悲しみ」から、現代の若い学修者は男女の恋愛の歌として誤解しやすい傾向にあらうが、そうではないことを確認しておかなければならない。おそらくこれ以前の学修の段階でそのような誤答が出てくるであろうが、そこでは訂正せず、この段階において明らかにするのが、グループワーク討論の活性化のために効果的であると思われる。逆に、総じて正解を与えることは、学修者の自立的・自律的思考やグループワークの活性化・多様化を妨げてしまうことになるので、正解を与えるときはグループワークを効果的に導くことに留意し、必要最小限でよいと考えられる。

さらに中国古典詩において、男性が旅立つ男性を送る場合に、友人達によって送別の酒宴が設けられ、そこではなむけの作品「送別詩」が作られることが通常であり、送別詩が中国古典詩のジャンルや分量において大きな部分を占めている、つまり送別・別離が、中国古典詩の中心的なテーマの一つであることを、学修者に教授すべきであろう。

6. 作品鑑賞のグループワーク

作品に対する学修者共通の解釈・理解が整ったところで、作品の鑑賞を行なう。ここでは、井伏沢「「サヨナラ」ダケガ人生ダ」をもう一度示し、人生においてそれほどまでに人との別れが悲しかったこと、換言するならば、別れを大切にしたことについて⁽¹³⁾、現代の私たち、ここでは学修者と比較して考察させることを行なう。また別れが大切なゆえに別れの酒宴が豪勢であったことは、第3節に画像とともに示した「金屈卮」という豪華な酒杯が作品に詠み込まれていることによって再確認すればよいであろう。

方法は、これまでと同様に、ホワイトボードを用いてのグループワークと発表形式による。

この場合も、考える指標なしでは学修者にとっては難しいと思われるので、その視点を教員より提示する。この場合、①生活環境、②交通手段、③通信手段、④その他の四つの視点から、現代の私たちの生活と于武陵が生活した九世紀前半とを比較して学修者に考察させることがよい方法であると考え（以上、下図）。

「サヨナラ」だけが人生だ

どうして別れがそこまで悲しいの？
どうして別れをそんなに大切にするの？

そのように考えた理由もまとめよう！

考えるポイント

皆さんは、人との別れにおいて、これほど悲しむでしょうか？

悲しまないとしたら、それは、なぜでしょうか？

考える視点をいくつか出し合って、話し合ってみましょう。
現代の私たちの生活と比較して考えてみましょう。

- ①生活環境
- ②交通手段
- ③通信手段
- ④その他

グループワーク中に、ここでは、上記の①②③の視点について、教員がヒントを学修者に与えていてもよいであろう。その場合、学修者に親近性が高い例示をするのが効果的であろう。

例えば、大学進学で郷里を離れて異郷の地に行く友達と送別会をしたときに、これほどまでに、悲しい思いをしたであろうか、このような現代的に見れば大袈裟な言葉を贈ったであろうか。しなかったとすれば、それは何故なのか。その一番大きな理由は、離別、離ればなれである状況を、比較的容易に解消できるからではないか。では何故比較的容易に解消することが可能であるか、といった思考のプロセスを示すとよいであろう。

さて課題に対する解答であるが、①の生活環境としては、当時より現代の方が一般的に社会が安定しており、戦争もほとんどなく、食糧や医療の環境が発達しており、異郷の地で人が死ぬ、客死する可能性が極めて低くなった、つまり友人の生存について心配する必要がなく、友人が死んで会えなくなるという不安がほとんどないことなどを焦点として説明すればよいであろう。

②の交通手段としては、現代は会おうと思えば、条件さえ許せば、どのような遠方でも飛行機・船舶・列車・自動車などを使って会いに行くことが可能であるが、当時は交通手段が馬・ロバなど未発達であったこと、それに加えて日本とは異なり中国の版図は極めて大きかったこと（特に唐代は漢代以来の巨大な統一帝国であった）などを説明することがポイントであろう。

なお、スライドに「どこでもドア」を挙げているのは冗談ではない。未来にそのようなものが完成すれば、離別という概念が現代と大きく変わってくるはずであることを説明するためである。その変化の度合いは、唐代と現代とに比べて、いっそう大きなものであるに違いない。極端な状況を想定することも、思考の整理には効果があるのである。

③の通信手段としては、現代よりも遙かに時間がかかり信頼性も低かった当時の郵便に比べて、整った郵便制度のみならず、電話やインターネットなどの通信手段の発展により、いつでも近くにいるようなコミュニケーションが可能となったことなどを説明すればよいであろう。特にSNSが、若者達の間を中心にして発達、普及した現況にあっては、学修者は、自己に即して即時的にその意味を理解することが可能であろう。

まとめとしては、以下のような説明をすればよいであろう。常套の説明ではある、畢竟、世界が狭くなったということであり、別れたもの同士の、様々な手段による再会の可能性が極めて大きくなったということである。逆に言うならば、この作品が作られた時代においては、上記①②③に見られる諸環境の危険性や未発達によって、一度の別れが人生で最後の別れ「永別」になる可能性が高かったと考えられ、それゆえ、これほどまでに別れを悲しみ大切に作る作品が詠まれたのである（以上、下図）。

加えて、著名な「生き別れほど辛いものはない（悲莫悲兮生別離）」（『楚辭』九歌「少司命」）を例に出すことも「永別」に対する理解を深めることとなろう。同じ永別であっても「死別」は再会の可能性が閉ざされている点において諦めがつくのであるが、「生別」はその可能性の存在しているにもかかわらずこれが最期の別れ、永遠に隔絶されるという、諦め切れない悲哀がそこにあるからである。

上記のようなことを共有できれば、この作品において送別の時間を大切に、別れを惜しむ気持ちが大きかったことが学修者に理解が可能であろう。そのような理解を前提として、授業の最後には作品を現代中国語音、或いは書き下し文で、学修者全員が声に出して詠むことにより、作品世界の鑑賞はより深いものとなるであろう。

①生活環境

- ・安定した社会
- ・治安がしっかりしている
- ・戦乱や戦争がない
- ・食料事情が安定している
- ・天災に対する準備が比較的整っている
- ・衛生環境が優れている
- ・疾病に関する対策が整っている

この作品が作られた時代は、

- ・現代と比較すると不安定な社会
- ・治安が整っていない 強盗・山賊に襲われる
- ・戦乱がいつ起こるかわからない 戦乱に巻き込まれ死亡する
- ・食糧事情が不安定 飢饉
- ・天災を防ぐ手段がほとんどといっていいほどない
- ・衛生環境が整っていない
- ・疾病にかかったときの医療が未発達である

②交通手段

- ・飛行機
- ・船舶
- ・列車(新幹線)
- ・自動車
- ・自転車
- ・どこでもドア

どんなに離れていても、会いに行こうと思えば、会いに行くことができる

この作品が作られた時代は、
交通手段は、馬・ロバ・馬車くらい
しかも中国は、日本に比べて国土が広い

③通信手段

- ・インターネットの普及 SNS (FB、Twitter、Skype)
- ・電話
- ・手紙

この作品が作られた時代は、
通信手段は、手紙くらい

世界が狭くなった。
再会の容易さ。
再会する可能性の高さ。

この作品が作られた時代は、
友人との別れが、
最後の別れ(永別)になるのではないかと
緊張や不安が、
現代に比べ、想像できないくらい
大きかったと思われる。

そういう視点から、
この作品を見れば、
よりいっそう別れの時間を大切に
しようとする気持ち
が伝わってくるはずである。

もう一度、作品を声に出して読んで
みましょう。

7. 今後の発展的学修に向けて

上記の授業プランは、高校生対象の模擬授業でその一部を試行したものであるが、本来は、大学の授業のために考案したものである。それゆえ、上記のような作品自体への理解と鑑賞のほかに、中国古典文学を理解する上で、重要な論点を学修者に提供しなければならない。

それは、なぜ于武陵「勸酒」のような別れに臨んでの作品が多く作られ、中国古典詩の重要なテーマのひとつとなったのかということである。単純に言えば、別れの作品が多いと言うことは、詩人たちの生活の中で別れが多かったということである。ではなぜ別れが多かったのか。このことは、発展的課題として、次回の授業に向けてのホームワークの課題とすることもできるであろう。

この問題に対する教授内容としては、次の点に留意すべきであろう。

まず中国の伝統的知識人の生態について解説する必要があるだろう。伝統的知識人階層は、伝統中国における統治階層であり、経世済民、天下を太平にし民衆を幸福にするために政治に参加するという高貴な義務(noblesse oblige)を有していた。同時に彼らは、文化の担当者であり、古典中国語のリテラシーの排他的所有者であった。そしてその教養として、特に、儒教の経典に対する深い理解と、詩文創作の才能が求められた⁽¹⁴⁾、などである。

次に于武陵の生きた唐代においては、詩文創作の中心的担当者であった知識人はおおむね政治参与においては不遇な中下級の士人層であった。彼らは科挙を通して中央政府の官僚となり高貴な義務を果たさそうと

したが、その多くは郷里を離れた地方の官僚、国境の節度使の幕僚などの役職に就くか、布衣として無官まま各地の有力者を訪ね歩くという生活を送っていた。いきおい、その生態において、旅遊が多くなり、旅遊が多くなれば別れの機会も多くなるということなどを説明する必要があるだろう。

ちなみに本稿で取り上げた詩人・于武陵も「大中年間（八四七―八六〇）、進士に挙げられたが官途が意にかなわず、陝西四川省域を往来し、時に売卜者中に身をおいたという。かつて瀟湘（湖南省の洞庭湖あたり）の地を訪れて屈原の故地に心惹かれ、そこに住むことを願ったが果たさず、嵩陽（河南省嵩陽山の南）に晩年を送った。」⁽¹⁵⁾という人生を送っており、于武陵自身も旅に明け暮れた生活をし、その中であまたの別離を経験してきたのに違いない。彼の「勸酒」はそのような生活史の中から生まれ出た名作でもあったのである。如上のことも学修者に対して補足的に紹介してもよいであろう。

このような伝統的知識人の生活から、別れをテーマとした作品が中国古典詩の重要な題材のひとつとなり、別れの作品が多作されたわけである。そのような文学の状況にあっては、如何に別れの悲しみを表現するかということが、知識人・詩人の力量として求められたと言える。

本節の内容は、第6節までと違い、高度な知識が求められるので、ホームワークの課題とはできても、アクティブ・ラーニングに必ずしも適しているとは言えない。その場合は、通常の講義形式で教授すればよいと考える。全ての授業をアクティブ・ラーニングの形にする必要はなく、それを取り入れつつ、通常講義を進めてゆけばよいと、論者は考える。

おわりに

本稿では、中国古典詩をアクティブ・ラーニングにより、グループワークと発表を通じて、難易度の高い資料から低い資料を提示し、段階的に作品に対する理解を深めてゆく方法を提示した。特に、学修者には、辞書を使用させず、こちらの提示した資料のみで考察させることとした。しかし、対象学修者や時間などによっては、辞書を適宜用いたりすることも試みなければならない。

また資料の提示とグループワークで使用した機器は、プレゼンテーションソフト関連機器とホワイトボードのみであったが、クリッカーなどを使用したクイズ形式で授業を進行することも、授業の活性化と学修者の理解を深める方法として取り入れることを検討しなければならない。

本稿が提示した方法による大学の授業実践とその報告とともに今後の課題としたい。

【注】

- (1) 平成26年度山口県立小野田高等学校模擬授業2014/11/06、平成27年度山口県立長門高等学校模擬授業2015/06/08。
- (2) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」「用語集」（1325048_3.pdf）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm、2015/08/23最終アクセス。
- (3) 注（2）「答申本文」（1325048_1.pdf）。
- (4) 山口県立大学。<http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/sinka/active-learning.html>。2015/08/23最終アクセス。
- (5) 注（4）に同じ。
- (6) 中華書局、1960年。
- (7) 松浦知久編『校注唐詩解釈辞典』「詩人小伝」「于武陵」（坂田新担当。大修館書店、1987年）。
- (8) 「桃」「李」の画像のURLを示す。http://hirugamionsen.jp/sightseeing/photogallery/index_4.html、http://photo-blog.cocolog-nifty.com/photo/2006/03/post_629a.html、2015/08/23最終アクセス。「梅」は論者の撮影による。
- (9) 画像は、京都文化博物館『大唐長安展』（京都文化博物館、1994年）による。
- (10) 『井伏鱒二全詩集』（岩波文庫、2004年）。
- (11) 井伏鱒二「訳詩」の訳がの独創ではなく、粉本が存在したことについては、過去の研究成果を踏ま

えて、高島俊男『お言葉ですが…⑦漢字語源の筋違い』 「「サヨナラ」ダケガ人生ダ」等（文藝春秋、2003年）にまとめられている。しかし、高島氏は、「勸酒」については、踏まえる粉本の訳からよく離れているとする。論者もそれに左袒する。

(12) 画像は、ふくやま文学館提供。

(13) 松浦知久『中国詩選（三）』（社会思想社、1972年）が「花発多風雨、人生足別離」とは、いわば「月にむら雲、花に風」であり、「会うは別れの始め」であって、その限りでは平凡な発想にちがいない。しかし、主観的にはどんなに屈折した尖鋭な自意識であっても、その根底には、人間として共通の根源的な喜怒哀楽が、否定しがたく存在している。万古以来、最も変わりにくいものとして存在している。その共通性と根源性に触れるものである限り、平凡な発想と的確な表現を持つ抒情詩は、まさにその平凡さとの確さゆえに、各時代の前衛詩人の白眼視にたえて長い生命を保つのであろう。」と指摘する。付け加えるならば、別れが持つ重みは、時代や社会環境によって異なるだろう。別れの悲哀が人間として共通の根源的なものであったとしても、その度合いは異なるであろう。一部の詩人たちが「花発多風雨、人生足別離」という平凡な発想と的確な表現を白眼視するのは、ありふれた発想、クリシェと化した表現であるからだけではなく、表現者としてそのような発想・表現ができない、つまり「人生不足別離」たる生活環境にあることを一つの要素として考慮に入れてもよいだろう。

(14) 「「詩書礼楽」を中心とした「教養」と、士大夫という社会的身分とは、切っても切れない密接な関係にあった。士大夫ならば当然「詩書礼楽」を中心とした教養を身につけていなくてはならず、「詩書礼楽」を身につけている人間が士大夫というものであった。……政治との関わりで士を定義すれば、政治を担当する義務と権利を有する階層、ということになる。……政治へ参与することの具体的な目標は、「経世済民」、世の中を秩序づけ、人々を救済することである。中国の「士」はこのように「経世済民」の志、政治担当者としての意識を、文化の担当者であるという意識とともに持ち続けたところに特徴がある。」（川合康三『中国古典文学彷徨』 「中国の士大夫と古典的教養」、研文出版、2008年）。

(15) 注（7）に同じ。

（中国文学）

A Trial Practice of Active Learning Methods for Teaching Chinese Classical Verse

Yoshiharu KAWAGUCHI

The purpose of this paper is to propose an example of trial practice of Active Learning Methods for teaching Chinese classical verse.

The teacher uses presentation software to show the problems and materials to the students. The problems and materials are given in descending order of difficulty. This is the feature of this paper's proposition.

The students divide into groups of about 6. Each group works in collaboration to resolve the problems that the teacher gives. The members of each group are seated around a comparatively large table and jot down many ideas for the answer on their whiteboard as far as possible. At that time they must draw some pictures for the following presentation. After that some members of each group show their whiteboard and express their own group's answers to the students of other groups. Meanwhile the students of other groups ask them some questions. Each group uses other groups' answers as a reference to make their own answers better.

The advantage of this method is that the students have an active role in the class. Furthermore, this method makes it possible for the students to gradually improve their answers through mutual learning and finally be able to get to the correct answer together as a whole class.

这篇文章试着提供一个方案使用积极学习方法(Active Learning Methods)讲授中国古典诗歌。

教员使用演示软件(presentation software)而给学生们提示课题和资料。

学生们分为六个人左右的班,各班一起解决教员提示的课题。各班的学生们围着一张比较大的桌子而把各种各样的注意写在白板商量和解决课题,然后向其他班的学生们提示自己班的白板(那里写着答案,答案中可以画图)而解释。其他班的学生们对于那个班的答案提问题。其他班也参照那个班的答案而改善自己班的想法。这种方法的优点是学生们不但不被动地上课而且主动地参加课堂教学。还有学生们通过互相听其他班的报告,结果全体能够共享有关于课题的好答案,共同思考剩下的问题等等。

教员提示的课题难易程度是渐渐降低,这也是本稿提示方案的特点。